



インド洋の島国スリランカで聴覚や発達に障害がある女性の自立につなげようと、現地在住の日本人らがネイルサロンの開設準備を進めている。障害者への差別や偏見が根強く残るが、高い技術を身に付ければ個人での開業も夢ではない。「ネイリストの卵」たちの努力を支えることで、障害者を取り巻く環境や意識を変えたい狙いもある。  
(コロンボ共同＝岩橋拓郎)

# 指先に込める 障害者の自立

手話でやりとりしながらネイルケアの練習をする女性たち



## 差別残るスリランカ 日本人らネイルサロン開設準備

6月上旬、最大都市コロンボ近郊のビルの一室で、18〜29歳のスリランカ人女性6人が模造の爪や紙に描いた爪の絵に色を塗り、黙々とネイルケアの練習をしていた。3人は聴覚に障害があり、うち2人は完全に聞こえない。他の3人は発達障害がある。

支援しているのは現地に住むNPO法人「アパカス」（北海道函館市）代表の石川直人さん（46）。2002年に青年海外協力隊員としてスリランカに着任。任期満了後もとまり、障害者の自立支援をしようと12年に視覚障害者による指庄の店をコロンボに開いた。

政府の12年の調査では、人口の約8%に当たる約160万人に何らかの障害があるとされるが、統計が少ない。石川さんに



紙に描いた爪の絵に色を塗って練習する女性

## 社会進出を後押し

よると、障害がある子の社会との接点を保護者が少なくしようとする傾向があり、基礎教育や就労の環境も十分でない。

交流サイト（SNS）の影響で現地でもネイルケア人気が高いことに着目した石川さんは昨年9月、日本国際協力財団でスリランカ支援を受けてきた伊藤奈保子さんと共同でネイルサロン開設計画を進めることにした。

地元の職業訓練校の協力で6人が選ばれ、昨年12月に研修開始。週6日、午前9時から午後5時までノウハウを学ぶ。NPO法人「日本ネイリスト協会」の教材を使ったり、日本からネイルケア講師に来てもらったりして、目指すは日本水準のきめ細かな技術だ。

全員が研修場所と同じ建物で

共同生活し、石川さんによると「私のせつけんを勝手に使った」とささいなことでもけんかになることもあった。「技術面だけでなく精神的にも自立できるようにサポートしたい」と話す。

両耳が全く聞こえないタルシカさん（25）は、なぜネイリストになるのかとの記者の質問に、仲間の手話を介し「興味があったから」と回答。「共同生活は楽しい？」と尋ねると、はにかみながら親指をぐっと上げた。

7月からクラウドファンディングで資金を調達し、9月の開設を目指す。石川さんは「彼女たちが積極的に社会進出していけば、社会の側も障害者が置かれた状況を知る契機になる。競合店が多いが、技術でしっかり勝負できるようにしたい」と意気込んでいる。



手入れした爪を披露するタルシカさん（25）もスリランカ・コロンボ近郊  
(共同)